

感情に關する諸問題

千 葉 胤 成

凡そ意識現象は通例複雑なる成立をなすのみならず、感覺知覺若くは統覺等はそが意識現象たる限り亦何等かの主觀的狀態を伴隨して以て其等意識經驗を様化するものである。(様化とは或經驗に作用して種々多様な容相の差異を現せしむるを云ふので英語の *modify* と云ふ語は其意味稍之に近い。此意識經驗を様化する主觀的狀態を名けて感情と云ふのである。然るにあらゆる意識經驗は必ず其主觀的狀態を伴隨するものであるから、感覺知覺統覺等は常に之に應ずる感情と分離して經驗するを得ず、吾人は唯研究の便宜上之を分解抽象して考察するに過ぎない。加之意識經驗と其主觀的狀態とは必ずしも相應するものにあらず、即簡單なる經驗にして複雑感情を伴ふことあり、複雑なる經驗亦必ずしも之に伴ふ感情簡單ならずと

云ふを得ない。故に複雑なる感情は之を分解するときは簡單なる感情となるも、複雑なる意識經驗に伴ふ感情は之を分解するも其意識經驗をなす要素的經驗に伴ふ感情となるものではない。即ちあらゆる意識經驗は其主觀的狀態として何等かの感情を伴ふものであるが、感情は明かに其等經驗と分離して考察し得るものである。吾人は今暫く感情一般に關する諸種の問題に就き從來の學說を通覽し併せて吾人の所懷の一端を略述しやうと思ふのである。

然るに感情一般に關しては感情の本質如何及感情の要素的作用は果して如何なるものなるか等は重要な問題であるが、之に關聯してなほ種々重要な研究の題目がある。

二

前已に述べたる如く、吾人の意識經驗を様化する主觀的狀態には簡單なるものより複雑なるものに至るまであらゆる發展の度を有する。而して感情てふ語は是等凡てを總稱するものであるが、從來種々の意に用ゐられて居るのみならず之と類せる他の諸語との間に概念の混同を生ずること少くない。故に吾人は今感情一般に

つき論ずるに當り先づ感情及之に類せる諸語の意味を明かにして置かうと思ふ。

先づ感情てふ語は英語の *feeling* の譯語である。然るに *feeling* は或は簡單なるもの或は複雑なるものを指すことあるが、通例はあらゆる種類を包括する總名として使用せられ、獨逸語の *Geftühl* と語源を同じくし *feel* てふ動詞より來て居る。*feel* は其最古の形不明なれど稍古き形に *afolian* は知覺することを意味し、殊に身體又は四肢を以て觸るゝことにより知覺する場合に用ゐられたが後には主觀的感ぜの意に用ゐらるゝに至つたのである。又佛蘭西語では *sentiment* の語を用ゐるがこれは後に述ぶる情操の語と混同され易し。*feeling* 又は *Geftühl* の語は從來屢々生理學者により有機感覺又は感覺感情の結合の意に用ゐられ今日なほ之を襲用するものがある。此の如く *feeling* はあらゆる種類の感情を表はす語であるが、其簡單なるものに對しては特に *affection* の語を用ゐる。されど此語は往々にして愛又は弱き感情の俗稱に用ゐらるゝことがある。又此 *affection* が形容詞として使用さるゝときは *affectionate* であるがこは *feeling* の形容詞たる *affective* と屢々混同される。猶又 *affection* と混同される他の語がある。それは即 *affect* であるが、こは動機の感情的要素を指すものであつて簡單感情の意ではない。更に注意すべきは獨逸語に所謂 *Affect* は又全く別義で

こは情緒卽ち 'emotion' を表はすことである。

更に翻りて邦語の感情につき見るに、こは勿論支那より來り不覺寒暑之切肌利欲之感情劉伶酒德頌とある是である。然るに此中感の字は感覺の語にも冠せられ、かの易に寂然動感遂通天下之故とあるが如く觸れ動くの意がある。其字義は廣韻に動也从心咸聲とあるを見れば聲音により感と作り心の觸れ動く意を寓せるや明かである。されど吾人に殊に興味あるは寧ろ情の字義にある。情は集韻に性之動也从心青聲とあり卽ち亦音聲により情と作り人性の作用と解したやうである。儒家にては之を性の用とせる、又佛家に於ても之を昏動妄念と稱し諸の罪業之より生ずとせる、稍複雑なる意味を有しては居るが、何れも吾人の心意の主觀的方面を指せる點に於て相一致する所がある。之より諸義を生じ或は欲望或は誠心或は狀態或は趣味等種々の意に用ゐられては居るが、何れも主觀の發動てふ意を含まざるとがない。之を要するに *feeling*, *Gefühl* 又は其譯語たる感情は吾人の意識生活の主觀的方面全體を包括するものとして、其成立上最も適當なる語なりと云ふを得べく而して其簡單なるものを言表はすには特に *affection*, *elementare Gefühl* 又は簡單感情の語を用ゐて之を區別するを要する。

次に情緒てふ語は英語にては *emotion* であるが英國心理學に於て此語を用ゐる始めたのは割合に近時に屬し、吾人はヒュームに於て之を見るのであるが彼に於てはなほ *passion* 又は *affection* の語を用ゐる *emotion* は唯稀に用ゐられたに過ぎぬ。然るに後此語の屢用ゐらるゝに及び *feeling* 或は *affection* と混用せられ概念の不明を致せる場合少からずある。佛蘭西語にては同じく *emotion* と稱せられ獨逸語にては前述の如く *Affekt* と稱せられるが時に *Emotion* の語を用ゐることもある。

扱て *emotion* は羅甸語の *emovere* 又は *emotum* より來て居る。○は *out movere* は *to move* の意である。即一場所より他場所に移動することを意味しこれより複雑なる感情の表現を指すことゝなつたのであるが、恐らく情緒の移動し易きよりかく稱するに至つたものであらう。

邦語の情緒については江淹泣賦に情緒留連とあり亦複雑なる感情の状態を指して居る。情の字義は上に之を見たからこゝにこれを略する。然るに緒の字に至りてはこれは元來糸端を意味したのであるが、それより物事の起始、殘餘等の義を生

じ再轉して系統、繼續等の意を生じたのであつて、複雑なる感情を表はす情緒の語は之より來りしこと明かである。而して者は説文に別事詞也とあり増韻に卽物之辭とあり、卽糸に从つて緒字を作つたものであらう。(緒はシヨと讀むべきである。通例チヨと讀むは誤で吳音はヅでありチヨの音はない)。然れども後に述ぶるが如く同じく複雑なる感情も之を同時的と繼時的とに分つことが出来る。吾人は之が混同を避くるため前者を特に情操と稱し後者に情緒の名を與へやうと思ふ。卽前者は獨逸語にて *Vorstimmungsgefühl* と稱せられ英語にては *intentional feeling* と名くべきもの後者は上述の *emotion, Affekt* の語に應ずるものである。

更に *feeling, affection, emotion* の外に *sentiment* の語がある。こは情操と譯せられ多少複雑なる觀念組織により表はさるゝ對象又は其群に關係を有する複雑なる感情の傾向をいふのである。*sentiment* は羅句語の *sentire* より來りこれ亦もと感官及び心により知覺することを意味したのであるが、後高等なる情の意に用ゐらるゝに至つた。なほ注意すべきは其の形容詞たる *sentimental* 又は動詞的名詞たる *sentimentality* は *sentiment* と稍趣を異にし情操の過度なる際に使用さるゝことである。邦語の情操なる語も亦倫理的意味から來たやうである。(操にして慄ではない。慄は愁ふの意

である。元來操は説文に把持也とあり、曲禮に謀於長者必操凡杖以從之とあり、よ
り志を持して變らざる意となり更に風調趣の意となりしものなるが吾人が使用す
る情操の語は必ずしも倫理的意味に限らず一般に高等なる觀念組織に結合する感
情の傾向を云ふものであるから、寧ろ後の意味を取るを可とすべきである。獨逸語
にては特に此の如き感情の名を有せず *intellektuelle Gefühle* 又は *höhere Gefühle* と稱せ
られて居る。

以上の外なほ稀に *Conation* の語が用ゐらるゝことがあるがハミルトン始めて之
を用ゐラット亦之を襲用して居る。こは動能の譯あり意識の動的要素なりとせられ
て居るが感覺又は感情の外更に第三の心的要素存すてふことは現今の多くの心理
學者のとらざる所であり、そは寧ろ感情に屬すべきものと云ふべきである。

以上吾人は感情及之に類せる諸語の意味を略明かにし得たと思ふから、次に感情
の意義につき考察しやう。

四

感情てふ心的状態の意義に關しては吾人は三つの主要なる問題を有する。第一

には如何なるものを感情と稱するか、第二には感情は如何にして現出するか、第三には何故に感情は存するか換言すれば感情は如何なる目的を有するか是である。略言すれば第一は何者か第二は如何に第三は何故かの問題にして吾人は假りに之を本質、起源及價値の問題と名くる。

扱て感情の本質に關する見解は之を三つに分ち述ぶることが出来る。即哲學的、生物學的及生理學的及心理學的是である。

感情の本質に關して先づ擧げなければならぬのは哲學的見解である。此立脚地よりするものは先づ精神又は精靈なるものを立し感情は其活動又は狀態に過ぎずとなすにある。アウグスチヌスが快不快は精神が生活の障害に抗して其獨立性を保有せんとする際印象をして其精神の活動に一致せしむるために必要なる努力に基き起るものとせるは是である。又デカルトは感情を以て生靈(Lebensgeist)の運動により生ずる精神の興奮なりとし、スピノザは精神力又は自我の促進又は減退の狀態と見た。其他フヒテは感情は自我に於ける客觀が其主觀に對する直接の關係又は其存在が意識に對する關係なりと云ひ、ヘーゲルは感情は精靈(Geist)の朦朧たる交錯なりと云ひ、ヘーゲル派の勇將たるローゼンクランツは感情は直接の精靈なりと

して居る。

以上感情の本質に關する二三哲學的見解を列舉したが、凡そあらゆる科學的考察は結局哲學に其處を譲らざるべからざる如く、感情の本質に關しても亦究極哲學的思辨に没入しなければならぬ。併し科學的研究の結果を顧みず徒らに哲學に其隱家を求めんとするは學者のとらざる所であつて、感情の本質に關する科學的考察は必らずや觀察と實驗の成果に俟たなければならぬ。或は生靈を立し或は精靈に基き感情を以て其顯現なりとするも生靈又は精靈なるものは抑も如何なる者ぞ。是等は單に哲學的思辨より生じたる幻影に過ぎない。感情が是等幻影の顯現なりとするは恰かも説明を停止するものであつてこれによりて感情の本質を明むることが出來ぬ。要するに感情の本質に關する哲學的見解は何れも自家の哲學的立脚地より或精神的本體を立し感情をば其一顯現と見なすものであつて、實際の心的作用としての感情の觀察によつたものでない。従つて其結論は全く獨斷的であつて一般の價值を有するものと云ふことが出來ぬ。

次に述べべきは生物學的若くは生理學的見解である。此の兩者は常に密接なる關係を有し何れも感情をば有機體の或傾向又は體制に歸せしめんとするにある。

ゼームス及ランゲが感情を有機的状態の表出と見リボーが之を有機的傾向なりとせる如き是である。此の如き見解は古代希臘に於て已に存しディオゲネスは感情を血液と空氣との混合の度により説明したのであるが近代に至り稍異なる意味より同様の見解をとりしもの少なからずある。例へばホップスの如き感情は興奮が官感より心臓に入り來ることにより成立すとして居る。

意識現象の説明に際し之を身體的現象に結合せしむることは其の現象を直觀的なるかの如くする所があるから屢々襲用せられて居る。併し意識現象其者は云ふ迄もなく身體現象ではない。唯意識現象を考察する手段として使用せらるゝ限りに於て身體現象は意義を有するに過ぎぬ。されば意識現象に伴隨する身體現象をあぐることにより該意識現象を説明し得たりとするは大なる誤であると云はなければならぬ。元來此見解は有機體の體制傾向殊に循環系統が感情と密接なる關係あることを觀察せる結果生じたものゝ如くであつて其經驗的たる點に於て哲學的見解に一步を進めたるものなるのみならず從來感情の表出研究の前驅をなせるものとして注目すべきものである。併しながら有機體の傾向若くは體制其者と感情とは各別異のことに屬し兩者が親密なる關係を有すてふことは一が他より成立す

ることを證するものに非ずして一の假定たるに過ぎぬ。(近時生理學的硏究殊に著しいが其意味は異なり伴隨現象として之を見るのみで同時に感情が意識の一要素たるを許すものである。)吾人は更に進みて心理學の見解を一瞥しなければならぬ。

五

感情の本質に關する考察は哲學的若くは生物學的又は生理學の見解を以て満足するを得ず必ずや精神其者から説明を求めなければならぬ。即心理學の見解に入らなければならぬ。併し同じく心理學の見解と云つても自ら種々異なる立脚地より説明をして居るから以下數項に分ち其大要を述べやう。

(一) 感覺知覺に歸する者

吾人の經驗上知覺が感覺に先つが如く感情を説明するに際しても亦之を知覺に歸する説先づ起り後ち之を感覺に歸する説が生じた。トレンシーは吾人の内部感覺にありては印象又は状態の全體を知覺するもので通例愛情と名くるものは是であると云ひ、ブートゥルは感情はあらゆる知覺の根柢に存する自己の状態なりとして居る。ペインに至りては感情は吾人の感覺間の調和又は鬭争に基きて起ると明言し、

マッハ及ミュンステルベルヒは之を有機感覺及緊張感覺に歸し、近時此説を奉ずるもの尠くない。此考を高調するものは遂に感情を以て感覺の一屬性と見なすに至り現代に於ける其代表者はチーエンである。彼は感覺には三つの屬性あり性質、強度及情調是であつて情調は種々なる度に於て感覺に伴隨する快不快の感情に外ならぬと云つて居る。されど情調は感覺に必然的のものにあらずそが觀念の屬性たる場合には茲に複雑なる感情を生ずるとして居るが、觀念の情調も結局感覺の情調より來て居るとして居るのを以て見れば感情の本質は矢張感覺にありとするものと解せられる。

(二) 觀念に歸する者

ヘルバルトが感情は觀念相互の關係より生ずるとしてから感情を以て觀念に歸せしむる學者極めて多い。かのナーフスキも感情のみ獨り始原的精神状態にして他の凡のものの感情も亦は二次的導來的のものなりと云ひ、感情及努力は觀念が意識に顯はるゝ際同時に生ずる特別の變化なりとし而してそは觀念より生ずると考へたのである。フォルクマンも吾人が呼びて感情となす所のものは觀念の緊張の度の意識なりと云ひ、又クロッルは感情は心理現象の副次的形式にして觀念の結果として生

ずるものなりと云つて居る。マイノングが觀念は感情に對し心理的前提たりと云ひ、シュミットが感情は其自身としては觀念ならざるも其自己の状態の觀念の表徴たるを得と云つたのも共に同様の思想の根柢より出でたること明かである。近時此見解を最も明かにせるものはリップスである。彼に従へば感情は觀念の生起、平衡又は禁止の際生ずるものである。

(三) 認識又は判斷に歸する者

感情の本質をば感覺觀念に止らず更にそれを材料となす一層高等なる知的作用たる認識又は判斷に歸するものがある。かのシュルツェの如き感情は或事物の存在の直接の認識であつて觀念に對立するものなりとし、フリースに至りては之を判斷に歸し感情は判斷力の直接の活動であると云つて居る。

(四) 意志に歸する者

然るに更に之を意志に歸するものがある。例へばサリイは感情は經驗の調なりと云ひ之を意志の動的要素に歸して居る。又シュライエルマッヘルも感情は直接の自己意識にして思考及意志の相對的強度とすることが出來ると云つて居る。ウインデルバントの如きも感情はよりて以て吾人が自身には知られざる意志より何物かを經

驗する媒介者に外ならず即感情は意志の要求及衝動に對する反應を意味すと云つて居るが、こは意志其者であると云ふのではないが意志によりて感情生ずとする限り亦意志に歸する見解と見ることが出来る。

(五)意識全體に歸する者

以上は感覺觀念又は意志等個々の意識内容又は作用より感情の本質を説明せんとするものであるが、更に意識全體に關係せしめて之を説かんとする者が生じた。ブラトネルが感情は自己の現在の状態を意識することなりと云ひ、ヒルデブランドが感情は主觀的個人的規定の直接の意識なりとし、リールが感情は意識活動が意識自身に對する反動なりとせる、何れも意識全體の活動なりとせる點に於て一致して居る。ベネケが感情は直接の意識に外ならずとせるも亦或意味に於て同一見解の言表と見ることが出来る。

此見解は感情を以て意識の根本作用なりとする思想と密接なる關係があると見ることが出来る。ホルウイツは感情は心的根本作用にして他の意識は其複合又は昇進より生ずとし、チーグラも感情はあらゆる意識の根柢に存する原初的狀態なりと云つて居る。其他キユルペは感情は意識の根本状態なりと云ひ、エルサレムも感情

は意識の特別なる根本作用にして精神生活の起始且基礎たりと云つて居る。

(六) 意識の一要素とする者

現今に於て最も多く認容せらるゝ見解は感情を以て意識の一要素とするにある。感情要素と認識要素と對立し而かも兩者が親密なる結合たるを高調せるはカントであるが、此見解は恐らく茲に其源を發して居るものであらうと思はれる。而して其代表者はヅントである。彼は感情要素又は簡單感情は意識の主觀的要素なりとし、複雑感情は簡單感情より成るとして居る。彼によれば感情は一の中心作用にして意識が其中に入り來る觀念に對する反應換言すれば統覺作用の反應即觀念が自我より如何に受容さるゝかを表はすものである。又彼によれば感情は意志作用の動機として考へられ凡て或度の努力又は反抗を含む、即感情と意志とは同一作用の部分的現象である。之によりて見れば彼の見地は前項の意志又は意識なりとする見解と極めて相似たるものがあり其影響を受け居るや明かである。此の如き見解を最も徹底せしめたのはレーマンである。彼は先づ知的及情的作用の分離すべからざる意識の要素なることを詳述し、凡そ感情要素たる快不快は常に何物かに就きて快不快たりと云ひ兩者の親密なる關係を有することを主張して居る。(レーマン

の考は時により感覺又は觀念に歸する見解の如く思惟さるゝこともあるが根本の考は意識の一要素とする者である。エッペングハウスも感情は之に伴隨する感覺及觀念の根柢に存する同一原因の副次的影響なりと云ひ感覺觀念と共に意識の一要素なりとして居る。近時ミュラー、フライエンフェルスは有機意識 (Organbewusstsein) なるものを立し感情は其主觀的方面の發展せるものなりとせる尙略同様の見地と見ることが出来る。

六

感情の心理學の見解は精神其者に説明の根據を求むるものであるから感情の本質の科學的考察として最も真相を得たるに近きものであるが、以上の如く種々立脚地を異にして居る。就中感覺、知覺、觀念、認識及判斷等に歸するものは多少の相違は存すとすも何れも所謂知的作用に歸する點に於て其趣を同じくするものがある。故に吾人は以上の諸説を論評するに當り次の四つに分ち述べやうと思ふ。即一は知的作用に歸する者二は意志作用に歸する者三は意識に歸する者四は意識の一要素とする者是である。

(一) 知的作用に歸する者

先づ感情を知的作用又は其變化なりとする説は恐らく感官感情又は觀念感情或は狹義の知的感情の代表者なるものにつき觀察せる結果に過ぎぬ。蓋し是等の感情は所謂知的作用によりて感情現はれ知的作用ありて然る後感情生ずるを以て感情は是等知的作用又は其變化に過ぎずと思惟するに至つたのである。併し感情は其變異極めて豊富であつて感情を凡て是等少數の範圍に限定することは狹隘なる偏見に過ぎぬ。所謂知的作用の先行なき感情の存するあるを以て見れば感情は必ずしも知的作用又は其變化に過ぎずと斷ずることは出來ぬのである。

(二) 意志作用に歸する者

次に感情を意志作用に歸する見解は勿論兩者の親密なる關係より來るや明かである。ザントの説ける如く意志作用は感情を其動機として有し感情と意志とは同一作用の部分現象なりと云ふことが出来る。然れども之がために感情は意志なりとし又は感情は意志より生ずとせば誤れるの甚しきものと云はなければならぬ。何となれば意志作用なくして感情は存することを得るのみならず感情は多くは意志作用の先驅として現はれるからである。されど感情並に意志は何れも感覺觀念等

の所謂知的作用に對立して吾人の意識の主觀的方面をなし而かも意志作用は感情を其先驅とする點より見るときは、兩者の間に親密なる關係存するや明かなりと云ふべきである。

(三) 意識全體に歸する者

感情は意識の他の作用に比し全體的性質を帯びて居る。所謂知的作用は或客觀に關係し個々の感官又は體制を其媒介とし、又意志作用は知的作用に比し全體的ではあるがそが發動的なる點に於て亦自ら客觀に向ひ特殊の傾向を帯ぶる所がある。然るに感情は全然中心的狀態であつて客觀と何等直接の交渉なきを以て、自ら意識全體に影響を有し従つて全體的性質を帯ぶることが多い。意識は勿論統一的である。即此點より感情を意識全體の經驗又は反應となす見解は、意志作用に歸する見解と共に稍肯綮を得たるに近しと云ふことが出来る。然れども意識は感情のみよりなるにあらず、知的作用あり意志作用存する。故を以て意識全體の或經驗又は反應と斷ずるは實際の狀態に合しない點がある。

(四) 意識の一要素となす者

意識其者の究竟的考察は吾人を自ら哲學的又は宗教的見解に導くを以て茲には之

を避ける。唯吾人の經驗する儘の意識現象に就て觀察する時は明かに中に主觀的方面と客觀的方面とある。勿論こは、ナトルプの云へる如く相對的言説に屬し嚴密には割合に主觀的割合に客觀的と稱するを可とするやうである。兎も角意識に此兩方面の存在することは直接の經驗に訴へて明かである。即一は知的作用にして他は知的ならざる作用である。此知的作用に對立する他の作用或は状態を感情と名け、此の如くして感情を以て意識の一要素とするにある。茲に注意すべきは要素てふ語は吾人をして簡單なる作用を想起さしむる。然るに感情は簡單なるものゝみを指すものではない。寧ろこは意識の一方面とするを可とすべきが如くである。されど簡單なる感情に關する理論は以て複雑なる感情に適用することが出来るから、此意味に於て假りに意識の一要素なりとする亦不可なきが如くである。

七

以上によりて之を見れば感情を知的作用に歸するものは或特殊の感情の觀察の結果を以てあらゆる感情を説明せんとするものであつて暴も亦甚しきものと云ふべく意志作用に歸するものは親密なる關係を有することより異なる二現象を同

一視せんとする誤より來りしものであつて、共に肯綮を失せる論であると云はなければならぬ。唯之を意識全體に歸し又は意識の一要素となす説は、全然之に賛同することが出來ぬにしても感情の本質の説明として稍正鵠を得たるに近きものがある。然るに意識に關する吾人の見解よりするときは、所謂知的方面と情的方面とは全然別途の方面であつて之を物的科學に於て所謂要素と比することは出來ぬ。物的科學に於ける要素は或物質を漸々に分解して最早分解すべからざるに至りしとき、最後の物質體に名けたるものであつて、其物質體は各性質を異にすと雖もなほ一物質體たるに於て一である。然るに心理學に所謂要素は甚だ之と趣を異にするものがあり、通例意識の要素として感覺と感情とをあげ時に之に意志を加ふることもあるが、要するに吾人の意識經驗全體を分解抽象して得たる方面の差異を意識要素の名を以て呼ぶにある。嚴密なる意味に於て要素と云ふを得ず吾人は寧ろ意識の觀察方面の差異と見るべきやうである。蓋し知的方面と情的方面とは全然異なる範疇に屬し吾人は假りに之を意識、内容と意識、状態と名ける。即知的方面は意識を内容として見たる場合に應じ情的方面は之を状態として見たる場合に應ずる。而して兩者を包括して之を考察するとき茲に意的方面を生じこは作用の語を以て

表はすべきである。而して是等各方面を具有する全意識の進行は之を過程の語を以て言表はすことが出来る。

此の如くなるを以て知的方面と情的方面とは、統一的なる意識の二方面にして、兩者は必ず相伴隨し、一を存し他を缺くことなきものである。學者或は感覺先づ起り感情は之に次いて起ると考ふる者もあるが兩者の間に時間の前後を想定することは到底不可能である。中島博士は之に關し實驗的研究を試み、一般に情調は感覺到後れて現はるてふ結論を得て居る。されど其得たる數字の意味は考慮を要するものがある。簡單感情の情調は頗る不定であつて感情の果して何れの時に生起せしかを決定することは到底不可能である。例へば驚駭の場合には感情要素は却りて感覺到先ち存する如きことがあり、之によりて兩者の分離を主張するものもあるが吾人が不意に或刺戟によりて驚駭の情を起せし場合、何等感覺的經驗存せざりしかは疑ふべきである。レイマンの云へる如く、寧ろ或器官に於て一種の緊張を伴隨することがあるやうである。經驗の瞬間に於て直接其刺戟の觀念の明瞭ならざる故を以て、感情のみ獨り生起せりと考ふるは早計の甚しきものと云はなければならぬ。即感情は常に或知的内容と共に起伏するものにして意識は凡て兩方面を具備して

進行するものである。

以上の考察よりして感情の特質を検するに、先づ第一に認めなければならぬのは其主觀的なる點にある。蓋し知的内容は常に自己を超越して觀察する主觀と異なる客觀界を指示するに、情的方面は直に主觀其者に該當する。即吾人の個々の感官知覺は外界に投射され物體の性質と考へらる。故に吾人は日常物體をば色あり音し、堅き又は軟き等のものとして見る。然るに感情は之に反し唯主觀に關係し、吾人は快不快を以て物體の性質とは見ない。固より兩方面は意識現象たる限り皆主觀的ではあるが、或意味に於て感情は遙かに高度に於て主觀的にして主觀以外の物體の符號ではないのである。次に許さなければならぬのは感情は意識全體に關係を有することである。意識の知的方面は上述の如く主觀以外の外界を指示するものであるが、其際身體の或器官又は體制の媒介によりて始めて之を得るのである。従つて夫々の器官及體制に應じて自ら多種たらざるを得ない。然るに之に反して情的方面は主觀其者に關係するを以て、其自身統一的にして意識全體の組織に關係するものである。故を以て知的内容に對する關係より多様の趣の違を存すとすも、其自身としては云ふ迄もなく一様性を帶ぶるものがある。然るに以上の二つの

特質よりして更に感情に特有なる著しき表徴を生ずる。そは即明度を缺如すると云ふことである。感情は強度、繼續の屬性を有すること他の意識作用と同様であるが、そが明度を缺如する點に於て大に其趣を異にして居る。故を以て吾人は之に注意するを得ず、之に注意するや感情は消失する。例へば合奏を聽き繪畫を觀て快感を得んとせば吾人は聽き觀る所のものに注意しなければならぬ。若し快感其者に注意するときは快感は忽ちに消失し去るものである。友の死を悼み悲しんで居る際に悲哀其者につき考察するときは暫く遣る瀨なき悲嘆の情を和ぐることを得るものである。此の如く見來るときは感情の本質は略之を髣髴することを得。即感情は意識の主觀的方面にして、意識全體に關係を有し、明度を缺如するものであると云ふことが出来る。吾人は更に感情の起源に關する問題に考察を轉じやう。

八

感情は如何にして現出するか。凡そ精神現象の起源の科學的考察には二つの途がある。即一は個人の發達で他は種族の發展である。リボアの喝破せるが如く原始的情緒を決定せんとせば抽象によらずして論證によらなければならぬ。即一は

兒童につき他は動物につき精密なる觀察又は實驗をなし周到なる考究を経なければならぬ。されど二者中動物は感情の研究に直接の利益なしと考へられて居るが研究の方法にして發達したならば此方面より光明を得る蓋し尠少ならざるべきを信ずる。然るに従來兒童並動物の感情状態につき成遂されし研究は、多くは情緒の表出にあり、幼兒又は下等動物につき精密なる研究を試みしもの甚だ多くない。

先づ兒童の感情状態につきてあぐべきは防禦的情緒ともいふべき恐怖である。ブライエルによればこは生後第二日に已に現はるとして居る。されどそれは恐怖其者と云ひペレノは第二月に於て見らるとし而して初め聽覺よりし後視覺により喚起されると信じて居る。次に防禦的情緒に繼いで起るは攻撃的情緒の形にて現るる忿怒である。ペレノは第二月と第三月との間に現はるとし、ブライエル及ダーキンは第十月以後にあるとして居る。勿論ダーキンの場合は眞の意味に於ける忿怒であつて眉の收縮等ある場合を指して居ることを注意しなければならぬ。第三には愛情である。ダーキンはこは夙に現はれそは第二月に已に微笑するにて知るを得として居る。但し第四月以前は極めて不明瞭で第五月に至り乳母に向ひ行かん

とする念を示すも眞に自發的愛情を示すは第十二月なりと云つて居る。第四に人格即自我に結合して現はるゝ愛情がある。之に二つあつて、一は消極的にして無力又は衰弱感情となり、他は積極的にして力又は不敵の感情となる。第五に現はるゝは性的情緒にしてこは原始的情緒の最後の形である。之によりて見れば兒童初期に於ける感情生活は極めて原始的にして喜悲等の比較的高等なる情緒は後に現はるゝものである。而して此の如き原始的情緒は動物の觀察に於ても明かに之を認むることが出来る。

然るに此の如きは原始的とは云つても稍複雑なる感情につきての觀察のみであるが上述の如く感情其者の起源如何の問題は更に簡單なる感情につきて考察しなければならぬ。されど此の如きは其研究甚だ困難なるを以て從來の文獻極めて稀である。唯茲には二三學者の所説を記するに止める。デカルトは最初の感情は快なりとしたが他の學者も、快は吾人の自由なる活動より起るを以て、苦は快の禁止従つて快に後れて生ずとして居る。されど多くの學者は寧ろ其反對説を唱へて居るやうである。彼等は冷觸の印象呼吸の初には苦先づ起ること、又は孩兒及新生動物の泣き喚ぶことより之を證せんとして居る。殊に泣聲を以て説明するとすることは

屢採用されしとであるが、ブライエルは之を拒み之を以て反射運動に過ぎずとして居る。思ふのには新生兒の最初の泣喚は從來反射運動以上のあるものと思惟さるるも呼吸に伴ふ此の最初の音聲は純粹にして單純なる反射に過ぎない。更に彼はカントが生兒の發する泣聲は恐怖の音調を有せず興奮と忿怒の音調を有し、それは苦痛にあらざる何等かの不快を感じざるが故であり、而してそれは疑もなく動かんとして不能を感じ即自由の束縛を感じざるがためであると云つて居るのを引用して次の如く述べて居る。即カントの見解は多く許容せられ現今に於てなほ新生兒の泣聲に心的意義を與へて居るものが多い。併し無腦の孩兒も生れて泣き喚ぶのに多くの健全なる幼兒は生るゝや嚏することはダーキンの注意せる所である。グッマンが六十人許の幼兒を觀察した結果によれば最初の二三日は針の刺衝に對し殆んど感覺がなく最初の週に於て唯輕き感覺を有するのみであると。たとひ喚聲が何等かの心的意義を有するも成人のそれに等しきかについては疑問なきを得ずなほ精細なる研究を要するものと云はなければならぬ。

感情起原の論は感情の本質に關する説明に大なる補助者たるものであるが之に關する研究は上述の如く甚だ幼稚たるを免れぬ。而して感情の如何にして現出し

又其原初的感情は何ぞや等の問題は前述の如く兒童及動物の心理の解明に俟たなければならぬ。或は更に簡單なる處に溯りて研究の歩を進むるを要するものと思はれる。然るに此方面の研究は漸く萌芽を發したるに止り其成遂は之を後來に期しなればならぬ。従つて現今にありては感情の起原に關し多く言ふ能はざるを遺憾とする次第である。

九

茲に感情の價値とは前述の如く換言すれば感情の目的如何を指し、感情なるものは吾人人生又は更に生物に對し如何なる意味を有するかの問題である。此の如き問題は元來心理學其者の問題ではない。感情が人生又は生物に有用なるか無用なるかは心理學とは沒交渉の問題と云ふべきである。併しながら吾人の考察の究極は自ら茲に至らざるを得ざるのみならず、之に關する考察は又他の諸種の問題に大なる光明を興へることがあるから一言之に及ばなければならぬ。

快は誘惑にして人生の妖力なりとし、不快は吾人の警告者なりとして、之を神或は自然に歸する超越的説明は暫く之を措くときは、感情の價値に關する論は何れも動

物の生存條件に其原因を求むるにあるやうである。ロツエは快不快は刺戟の影響と規則的なる身體的或は精神的生活々動との間の一致並に不一致に基くとせるが、此の如き思想の萌芽は已にアリストテレスに於て見ることを得。彼によれば快は本體の通常成功せる活動の完成なりとせる是である。カントが満足をば生活促進の感情と名け苦痛をば生活障礙の感情と名けたると共に其本質に於て同一思想といふことが出来る。スペンサーは快と有用、不快と有害との一致を明かにし感情を以て適者生存の重要な要素として居る。然るにリポトは之に關し次の三つの例外あることを示して居る。

(一) 社會的存在の條件が自然的存在の條件に加はつてから茲に他種の活動を要求するに至り、其結果種々の不一致を生じた。例へば掠奪的傾向の殘存は人をして満足すること能はざらしめ、單調にして過剩なる仕事の必要は快の過剩により之を償ふこととなつたのである。

(二) 社會的原因より起る是等例外になほ個人的原因より起るものがある。或毒物は快を覺え、而して死を致さしむる。外科的手術は苦痛なるために行はれ、想像の世界に住することは快なれども人をして衰弱せしめ日々の仕事をなすこと能はざ

らしむる。

(三) 個人は若くして未だ多産なる間は其個人の禍福と種族の禍福とは一致するも生産期を過ぐるときは兩者は相反することとなる。一無脊椎動物中には屢々親の死は増殖の結果たることがある。

かくて彼は快と有用、不快と有害との結合は學者の形式に過ぎず、事實にあらずして唯經驗的法則たるを以て満足しなければならぬとして居る。法則は勿論幾多の例外を有する。されど例外の存することは必ずしも法則の成立を拒むものではない。リポールの批評にも拘はず、此考は近時亦多くの學者の容るゝ所となりチャーエンも情調の特質として發生學的關係存することを認めて居る。即彼によれば快の感情に結合する刺戟は多くは同時に又動物の營養攝取並に其繁殖を伴ふ所の刺戟たり、不快の感情に結合する刺戟は同時に動物の生命の危険を伴ふ刺戟である。之により一般に動物は、前の刺戟に近接せんとし後の刺戟は之を避けんと力むるものであるとして居る。最近此考を最も明瞭にせるはエビンゲハウスである。彼に従へば快の感情は身體器官及之を支持する全體制に適合し又之に必要な身體器官の要求に基き、不快の感情は之に反し該器官の特質に適合せず、従つて器官並に其支持

者を傷害する如き要求に基くものである。故を以て感情は目的的基础を有し生活の維持に對し特別の意義を有するものとして居る。

之を要するに感情の價値に關しては幾分の例外存するも客觀的には明かに生體の有益有害の關係に基くとすべきである。勿論此關係の存在は此關係の意識の存在を含むものでない。更に大なる意識者に就ては茲に論ずる限にあらず。多くは寧ろ此の如き認識豫知すら存せざるものである。而して感情の目的性質は生體の發展に従ひ漸々成れるもの、而かも現今に於ては個體にとり最後のものにして又最初のものである。即最初のものなりとはそが豫め定められたるを云ひ、最後のものなりとはそが目的たるを云ふのである。故に之を全體より考察するときは感情生活の價値は生活體の維持に存すとなす、蓋し當らすと雖も遠からざる見解であると云はなければならぬ。(未完)